

お世話になりました

渡辺京二

茅嶋さんについてまず思うのは、ひとかたならずお世話になったということだ。この人は河合の福岡校が出来たとき、講師としていっしょに入った。それが初対面だった。

私は予備校で教えることに何の抱負もなかった。ただ喰わんがための労働であった。むろんいただいたお金だけのことは懸命にやる。それだけのことで、教育に抱負と情熱を持つ茅嶋さんの協力者ではありえなかつた。にもかかわらず、彼は私のことを思いやって、実にいろいろと私の面倒を見て下さった。例えば、文教研の研究員に私を押し込んで下さったのも茅嶋さんなのである。

なぜだか知らない。私が彼を好きだつたから、お返しに好いてもらったのかも知れない。私が彼を好いたのは、あの豪快で鼻っ柱の強い外面の蔭に、実にデリケートで思いやりの深い柔らかい心が秘められていることを知ったからだ。私は一度彼に尋ねたことがある。「あ

なたは人の機嫌をとろうとしたことがありますか」「ない」と彼は即座に答えた。「じゃろう、じゃろう、そういう昂然たるところが好きだな」と私は思いつつ、にもかかわらず、この人は他人の心の機微をよく察する人だと感じた。要するに観念的でありながら、大人だったのである。

一時講師室では、質問に来た生徒を泣かせるというので、茅嶋さんと私が並称されたことがあった。でもその内実は違っていて、彼は生徒の質問に対して、思想の大原則に則って質問自体の前提を剔抉するのである。私はそうじゃない。説明してもわからないから、段々声が大きくなり、気がつくくと相手が泣いているのであった。

茅嶋さんは私より十歳も歳下であったのに、時として兄のような気がするものがあつた。私のことを気にかけて下さるもので、そんな思いもしたものでか。でも彼の方にも、なぜか私に心の慰めを求める気味があつたと思う。というのは、河合を辞めたあとも、しばしば電話を下さつたからである。そういうとき私は、何か面白からぬことがあつたなど感じた。

彼が私より早死しようとは思わなかつた。悲しい。でもこれは私が長生きしすぎたのだ。友人というのは、死んでみられると、いい面だけが思い出されるかという、そうでもなくていやな思い出もいつまでも消えない。しかし、茅嶋さんについては、いやな思い出はひとつもない。ありがたいことである。